

Probat への旅 - 後編

茂原からひたちなかのサザコーヒーさんに向かいましたが、地図上では遠回りでも、知らない一般道を避けて高速道周りを選択。それにしても距離があり、ノンストップで2時間以上もかかる道のりで、その分お互いのいろいろな近況を聞くことができたのは有りがたい時間でした。今回は鈴木誉志男会長のご招待で取引先の懇親会に同席させていただいたのですが、茨城県には立派な式場を備えたホテルなども多く、今回もそうした会場での懇親会でした。その日は会場であるホテルに泊まることにして、翌朝サザコーヒーさんの本店にお寄りしたのです。



当日のサザコーヒー本店にて

開店前のサザコーヒー本店のテラス席で、会長に淹れていただいた珈琲を楽しみながらいろいろな話をお聞きました。本店前面に据えられた屋号を彫り込んだ巨石は、採石場で選んで特別に切り出したこと、庭の巨木も自ら惚れ込んで手間を顧みずに山から移植したこと、その樹が根付くまでの長い時間のこと。そして今回の我々の目的について、その時話されていた一言が脳裏に焼き付いています。「私だったら、Probatは手放せない…」。もちろん同時期にコーヒーを生業とした隣県の同業者ですから、白土氏のことをご存じでの言葉だと思いますが、その苦い思いも判ってのねぎらいのお言葉と受け止めました。コーヒーを信じて長い時を刻む珈琲人には、励まし合い、ともに苦しい時を乗り越えてきた共通の想いがあり、生業として人生を賭してきた同志としての共感があります。全国の様々な土地に根付くコーヒーへの想いは、ライフワークとする覚悟を決めた時から、片時も離れずに存在して心を揺り動かします。かくもコーヒーはいつの時代でも魅力的です。

鈴木会長の静かな言葉と居住まいに感じたことも、嶋中芳氏ではないがやはり「コーヒーに憑かれた男たち」と言えるのではないか。そうした比類なき重さの片鱗が、ここサザコーヒー本店の佇まいとして今も時を刻みます。盛夏のガーデンは緑が濃く、樹々や草花の確かな息づかいに溢れている。作り手の想いを形としたこの庭も、自然界がもたらす四季のリズムでうつろう節理の中にあるようですが、それこそが人の手を越えた醍醐味でしょう。想いを越えたとき、そこには作り手の真の目的が最初からあると気付くことがあります。

そこからはひたすらに高速道を走りました。常磐自動車道をいわきまで、そこからは東北横断道いわき新潟線で郡山インターまで向かいましたが、これは思いのほか長いドライブでした。道は快適ですが車は少なく、パーキングエリアもすっきりと空いています。こうした高速道路を走った経験はあまりないのですが、それも目的地までの遠さの印象を深めたのかも知れません。一人のドライブなら辛い旅だったでしょう。

コーヒーの話に少しは付いていけるようになったことでは最大の恩人で、味や感覚も DAC コーヒー白土社長の薫陶からスタートしたと考えています（少なくともコーヒーに強く惹かれました）。ご恩に応える形でお手伝いさせていただいたカフェ事業ですが、久しぶりの再訪がこうした件であることに重い気持ちで DAC コーヒーさんに到着。考えるところや反省点は私の中に渦巻くのですが、今は無事に話がまとまるように努めることが第一です。

6年ぶりの訪問でしたが懐かしいお顔に触れて言葉に詰まりました。奥様には変わらずに明るく言葉をかけていただきましたが、白土社長は急ぎで話を進めたい様子で、二人を工房に案内して Probat の電源を入れます。モーターの駆動音とともに、駆け寄りながらメーターのチェックや駆動の状態などをつぶさに調べ、小一時間ほど触っていた二人でしたが、小原氏が引き受けるようです。彼にとっては念願の Probat ですが、この機種は海外でも人気が高く、中古マシンは市場で奪い合いの様子。こうした方法で、大切に使われて管理の行き届いた Probat が手に入るなら幸運かも知れませんが、手放すことの無念さや、その辛い思いは私にも理解できます。

直接価格面のやり取りがあり、問題は一連の設備の解体と搬出から移送、メンテナンス、組み立てから試運転という難題です。この作業は小原氏が手配した焙煎機メーカーの応援を得て行ない、設置まで漕ぎつけたのは年内ギリギリでした。新規購入の場合は、スペースさえ確保すれば後はメーカー（販売会社）で、設置から試運転まで行って引き渡しますが、中古は遥かに手間がかかり大変です。気付けば新マシンを調達した場合と変わらない総額ともなりかねないので、手を差し伸べ、助けていただいた小原氏には心から感謝しています。

それから暫くは徳島を訪れる機会がなかったのですが、この Probat との再会は 2014 年 6 月でした。西岡氏にも徳島に同行いただきましたが、前年の金沢行きでは小原氏に同行いただいている。コーヒーは飲んで楽しむだけの私ですが、不思議なご縁だといつも思って感謝しています。

メンテナンス後の Probat の設置ですが、これだけの焙煎機を収めるために建屋も改修した立派な焙煎工房でした。この後に小原氏は屋号を長年親しんだ珈琲美学から Tokushima Coffee-Works に変え、隣接する創業店の千代が丸店は、研究や研修、セミナーや珈琲教室などの Labo として改組しています。2006 年から 2010 年を経て、2013 年まで、小原氏を悩ませた難題は多いものの、珈琲への探求心はますます募るようです。それにしても彼のエネルギーは枯れることがない。雅号をもつ彼の「カウンターの生け花」は、途絶えることのないもう一つのライフワークです。2010 年から既に 238 編を数え、ご家族や社員・スタッフだけでなく、お客様や卸先や取引先に至るまで、そして遠い私にまで届き寄せる瑞々しい泉のように感じています。



Tokushima Coffee-works
Probat の焙煎シーン（小原博氏）

今回のロングドライブの足は私の車、トヨタのイギリス工場逆輸入車でアベンシスのステーションワゴン。快適に走る車ですがトヨタのラインナップでは異端児です。もともと原点のラインナップはオーナーの年齢的・経済的な成長を辿り、その代表的なコピーが当時の印象的な「いっかはクラウン」でした。昔の車種で、「パブリカ - カローラ - コロナ - クラウン」のサクセスストーリーは経済成長のモデルとも言えます。しかし経済環境や消費者嗜好の変化に対応し、新しい車種がどんどん登場して華やいた反面、いつしか「初めから BMW」層が誕生して六本木のカローラと揶揄されたりもしている。本当に良い時代はいつ頃のことだろう、と考える年になってしまった自分に、少し切ない思いも有ります。

「寄る年波」という言葉がありますが、年齢を重ねることが後ろめたいと思うことはさらさらなく、たくさんの経験と失敗・反省の数だけ前に進めたのだとしたら、これまでいただいた多くの方々のご恩を素直に感謝できます。大事なことは人生、勝った負けた（勝ち組負け組）ではなく、その軌跡の豊かさだと考えるのです。ほんの些細な経験でも、自分にしか伝わらない細やかな事象でも、それに触れられた感謝は自分のものです。それを少しでも伝えられたらと願っています。伝説となったビンテージ Probat と張り合うつもりはありません。

2022.12.06 有限会社カフェグッズ 小林 文夫

© 2022 Cafegoods Co.,Ltd.